

「真っ黒な空」とか「真っ黒な穴」とか、そういう文学的な表現があります。また、「真ん丸な目」とか「真ん丸なお月様」という、これまた文学的な表現があります。でも、ちょっと無粋な指摘をしますと、科学的な見地から言えば、真っ黒も、真ん丸も、今のところ実現していない不可能な色であり、形だと言います。私も「へえ、そうなのか」と思ったのですが、黒いっていうのは、つまり光を反射せずに吸収してしまうから黒く見えるという状態なのだそうで、黒は光を吸収する色なんですね。そう言えば、黒色の服は光を吸収するところで、太陽の光を吸収して暖かくもなるわけですよね。でも、現在の技術では、光を100%完全に吸収する黒色は開発されていないそうです。限りなく真っ黒に近い黒色は表現できるけど、本当の真っ黒はまだ誰も見たことないということです。あと、真ん丸、つまり真円、真球というのも、物理的には実現不可能なのだそうです。数学的には定義できても、それを現実の物質で再現しようしたら、重力の作用とか原子レベルの凹凸とかが邪魔をして、現代の技術レベルでは難しいと言います。だからどうしたという話ではありますが、でも、私たちが言葉で気軽に使う「真っ黒」とか「真ん丸」が、実は、この世には存在しない状態だとしたら、色々と思い直すこともあるんじゃないかなと思います。

とくに「真っ黒」は、単純な色合いや色彩の話じゃなくて、人の心の在り様とか、人の悪さとか罪深さにも用いられる言葉ですから、ちょっと含み込んで考える必要があるんじゃないでしょうか。私たちは極悪人の、その心根を「真っ黒」と言いたくなります。心が「真っ黒」だから、あんな酷いことを、こんな惨いことをするんだと解釈したくなります。多分、その解釈はほぼほぼ間違いないでしょう。心が「真っ黒」だから、極悪人になったんだろうと。でも、さっき紹介した「科学的には真っ黒は不可能」という言説を当てはめてみるなら、極悪人の真っ黒と言われている心にも、わずかな光を放つ部分があるんじゃないかなと、思いたいのです、少なくとも私は。

こういう考え方には、極悪人に傷付けられ、苦しめられ、人生を奪われた人にとっては暴論だと思います。だから、極悪人に傷付けられ、苦しめられ、人生を奪われた人に対しては、私は何も言えることはありません。その悲しみと悔しさと、あるいは恨みや憎しみも、私は認められるべきだと思います。ただ、自分が極悪人に傷付けられ、苦しめられ、人生を奪われた人ではないなら、その

恵まれた立場に感謝しつつ、どんな極悪人も「真っ黒」はないと信じてみることは大切だと思います。それは、温情とか同情とか言う感傷的な話ではなくて、たとえ相手が極悪人だとしても、人間だからこそ持ち得ているであろう良心の片鱗を探し求めて、理解しようと努力することで、ほぼ真っ黒だった心が、普通の黒色に、黒色が濃い灰色に、灰色がちょっとずつ白色に変わることもあるんじゃないかと思うのです。それは、本当の意味での社会秩序、安全保障に繋がるんじゃないかと。まあ、言うは易く行うは難しですけどね。でも、我々のような信仰者が理想を語らないと、誰も理想を語ってくれないので、私たちは、稀代の極悪人さえ持っているであろう、光を放つ一部分、真っ黒には成り切れない人間性の輝きを信じてみたいと思います。・・・まあ、あと、これも戯言かも知れませんが、誰であれ、神様に愛された存在として、無垢な赤ちゃんの姿で生まれてきたと、多くの場合、受け止められているわけなので。どんな極悪人も、きっと生まれた時は祝福に満たされたと思うと、それはそれで複雑な話ではあります。人生と人間社会は、本当に複雑であり善意善良一色ではありません。でも、その複雑さを断罪するのではなく、科学し、解き明かし、次に安全に繋げる方向性があってもいいと思います。

もう一個、極悪人を語る上で複雑なのは、極悪人が死ぬ時って、どんな気持ちなんだろう、と想像してみることです。歴史上の独裁者、マフィアと呼ばれる人たちや、日本における極道の人たち。そんな人たちの死に際の感情を想像してみると、どうなんでしょうかね。もしも、死に際に、神様に救いを求めたら、神様は応えてくださるのでしょうか。これは、本当のところ神学的にも解決していない、神様の御心の神秘の部分です。

ただ、今日の聖書箇所を踏まえて考えてみると、私たちの納得できる、できないという気持ちを超えて、神様は「無垢で清い人」には、例外なく応えてくださるのだと言えます。

「無垢で清い人」。皆様は、これ、どんな生き方をした人だと思いますか？ 私としては、生まれながらに「無垢で清い人」は、せいぜい1歳までだと思っています。2歳から集団生活が可能になり、そこで人間関係を学び始め、その中で、多かれ少なかれ困るし、困らされるし。困りたくないなら、自分優先の言葉を語り、自分優先の行動を起こし、それが他の子どもの困り感に繋がり、言ってみれば幸せを阻害することになります。そんな子ども達の姿を無邪気と呼ぶこともできますが、その無邪気で泣かされた側の子の気持ちに寄り添うなら「お友達は無邪気だから許してあげる」とは言えますよね。誰も傷付けず、誰も困らせず、無垢で清い人でいられるのは、本当に

乳幼児期に限られるでしょう。もっとも、親として生きた人は、振り返ってみると、また偽らざる感情を思い起こすこともあるかも知れません。

ようするに、「無垢で清い人」って、現実的に考えてみると、かなり無理な在り方なんですね。人は、誰かに迷惑を掛けないと生きていけないし、知らないところで誰かを困らせたり、誰を傷付けたりするものです。それは、残念だけど、私は真理だと思っています。私たちは生きているだけで誰かに迷惑をかけ、そして、許してもらっている存在です。もし、その事実に対して言い訳するなら、それはそれで、すでに無垢であることを外れ、私は間違いを犯したことではないと主張するなら、それはそれで、清い振る舞いとは離れています。だから、私たちは、別に極悪人ではないけれど、「無垢で清い人」とはなり得ない。自分の過ちを認めても、認めなくとも無垢とはなり得ず、自分が完全だと主張しても、主張しなくても清いとは言えない。

でも、そんな私たちでも、そして、極悪人でも、「無垢で清い人」になれる瞬間があります。それは、「ごめんなさい」と思う瞬間です。「ごめんなさい」とは、自分の過ちを認めることだけじゃなく、その過ちを償いたい、出来るなら元通りにしたい、という意思表示ですね。この「ごめんなさい」という言葉を心から言う時、私たちも、そして極悪人も、きっと「無垢で清い人」に「して頂ける」のだろうと思うのです。それは、この御言葉を歌ったであろうダビデ王の人生に由来するものです。ダビデ王も、自らの過ちを認め、逃れないと受け入れた先で、「あなたの慈しみに生きる人に、あなたは慈しみを示し、無垢な人には無垢に、清い人には清くふるまう」と悔い改め碎かれた心をもって、本当に無垢であること、本当に清いこととはと弁え、歌い上げたのでしょう。

答え合わせと言いますか、今日の御言葉の伝えたいメッセージは、「あなたは今、現在、無垢で清い人か」という問い合わせではなくて、今後の未来に開かれた「神様は、無垢な人には無垢に、清い人には清くふるまい、御もとに身を寄せる人に主は盾となってくださる」という、救いのメッセージなのだと思います。それは、どんなに悪事を働いた極悪人でも、この先に、それこそ死刑目前でも「ごめんなさい」と真心から言うなら「無垢で清い人」として御心に留められるのでしょう。そして、私たちも、こんな自堕落なのにとか、こんな不信仰なのにとか、他にも、礼拝に行けてないのにとか、祈りの言葉が下手なのにとか、ダメなのにとか、あの人に比べたらまだまだなのにとか、そういう全ての自分を過小評価した後に、「なんか申し訳ない」と思うなら、その瞬間に、申し訣ない自分を全て神様に委ねる存在として「無垢で清い人」になるのでしょう。

ようするに、極悪人も、自信満々な人も、謙遜な人も、その人生の出来事における浮き沈みの中で、一瞬でも真心から「ごめんなさい」と思ったなら、それは自分の虚勢と自負心を剥ぎ取った本当の「無垢で清い人」になるということです。

だから、今この時点で、自分の悪事を隠していても構いません。逆に救われる自信満々でも構いません。この罪はバレないと思っていても、自分は必ず天国に行くと確信していても構いません。あるいは、地獄に落ちるかも知れないとか、絶対に罰せされるとか、不安になっていても大丈夫です。今この時点での、私たちの心情は神様に問われていません。だって、私たちは今こうして赦され生きているのだから。ただ、神様の導かれる、これから的人生において、私たちは必ず核心的な出来事に出会うのでしょう。その時に、私たちが、どう感じ、どう正直に告白するのか。無垢で清い人となれるのか・・・、いや、そうならざるを得ない現実を受け入れられるのかどうか。その時が来るかも知れないことを、ちょっと心に留めて過ごして参りましょう・・・。と言っても、相手は、私たちの神様ですから、優しく諭し、気付かせ、正しい道へと導かれる方を慕い、祈り求める日々を大切したいと思います。最後にお祈りを致します。

神様。

今日も、私たちをこの礼拝堂に招いてくださり、感謝致します。あなたは、私たちの人生に、喜びを置き、試練を置き、苦難を置き、慰めを置いてくださいます。その豊かな御業に触れる度に、私たちの心は上向き、そして、低きに落ち、この世に生きる者として当然の喜怒哀楽を味わいます。神様、どうか私たちが、その人生において、怒り、悲しみ、嘆き、叫ぶ時、私たちに本当の無垢な気持ちと、清い心をお与えください。この世に数多存在するありきたりな慰めではなく、本当に無垢で清い人に注がれるあなたの恵みを味わうことができますように。たとえ私たちが多くを失うとしても、そこに憐れみを置き、あなたが私たちの盾となり、救いとなってくださいますように。たとえ私たちが貧しさを憶えるとしても、その貧しさをも踏み石として幸いに至る道を、どうか示してください。あなたを信じ、あなたに祈り、あなただからこそ委ねて歩む毎日に、感謝することができますように。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名前によって、あなたの御前にお捧げ致します。